

最北港のシンボル



私と遺産

魚雷かわし逃げ込んだ

稚泊航路の花形は「亜庭丸」（3297トン）と「宗谷丸」（3593トン）であった。ともに国鉄が誇る最新鋭の砕氷型連絡船で、1940年当時、北海道と樺太を往来する旅客の56・6%が稚泊航路を利用した。

稚内市富岡に住む元国鉄職員、石井政雄さん（83）は、22歳の時に「宗谷丸」乗組員に採用された。蒸気式エンジンの操機手だった。

稚内と大泊との距離は167キロ、所要時間は約9時間。しかし、冬場の流水の海では10時間以上かかることもしばしばだった。宗谷丸の船首部分の傾斜角度は27度。流水帯に入ると、エンジンの出力を上げて氷盤を上から押しつぶすように砕きながら前進する。流水が厚く前進を阻まれると後退し、十分な間隔を置いてから惰力をつけて流水に体当たりして進んだ。

戦雲急を告げ、連絡船は敵潜水艦攻撃の標的にさらされた。45年7月18日、「宗谷丸」が大泊を出港し亜庭湾を岸沿いに南下していた時、護衛していた海防艦1隻に敵の魚雷が命中し沈没。間髪いれず「宗谷丸」も攻撃され、右へ左へと魚雷をかわしながら奇跡的に難を逃れた。石井さんは「本船着岸の時ほど北防ドームへの愛着を強く感じたことはなかった」とふり返っ